

## 世帯人員と意識上の家族の人員

—高校生・短大生・大学生の家族意識調査より—

小野瀬 裕子（郡山女大・非）

〔目的〕家族形態を把握する時、一般的に世帯を家族と見なす場合が多い。国勢調査では世帯を住居と生計を共にしている人々の集まり又は一戸を構えて住んでいる単身者としてゐる。しかし、進学や単身赴任等で別居する家族が増え、二世帯住宅の普及により、世帯人員と意識上の家族の人員のずれは大きくなっていると考えられる。本研究では、世帯構成の変化が著しい年代である15歳から22歳の学生の、世帯人員と意識上の家族の人員を比較調査し、家族意識を探究することを目的としている。

〔方法〕1999年12月と2000年1月に、東京都T高校1年（15-16歳）65名、福島県K短期大学2年（19-20歳）53名、福島県K大学4年（21-22歳）71名に質問紙調査をした。

〔結果〕1）意識上の家族の規模の平均は、高校生10.88人、短大生6.38人、大学生6.07人。世帯規模平均は、高校生4.63人、短大生4.28人、大学生2.63人。意識とのずれは、高校生が大きい。大学生は単独世帯が多く世帯規模も小さい。2）世帯構成平均は、高校生では核家族世帯61.5%・拡大家族世帯38.5%・単独世帯0%。短大生では核家族世帯41.5%・拡大家族世帯41.5%・単独世帯17.0%。大学生では核家族世帯21.1%・拡大家族世帯23.9%・単独世帯54.9%。全国年齢別平均より拡大家族世帯が多くなったのは、調査対象者の特性と考えられる。3）別居の家族がゐる割合は、高校生では70.8%、短大生では47.2%、大学生では81.7%。高校生は、祖父母・親戚をあげ、大学生は、離れて暮らす親・兄弟をあげた。家族と考える理由には、血縁や経済面と心情的交流面があった。会う年間平均日数は、高校生40日、大学生44日であった。4）同居の友人、世話になった人、飼っている動物を家族とする者もいた。